



神奈川県臨床細胞学会
Kanagawa Society of Clinical Cytology

ニューズレター

第 33 回神奈川県臨床細胞学会が帝京大学医学部附属溝口病院 川本雅司会長のもとに開催されました

神奈川県臨床細胞学会

第31号 平成27年6月23日発行

事務局：〒259-1143

神奈川県伊勢原市下糟屋143

東海大学医学部附属病院

病理検査技術科内

TEL：0463-93-1121(内線6563)

FAX：0463-94-6776

第 33 回神奈川県臨床細胞学会を終えて

帝京大学医学部附属溝口病院 病理診断科，臨床病理部
川本雅司，山田正人

平成 26 年 10 月 4 日 (土) に第 33 回神奈川県臨床細胞学会をお世話させていただき，スタッフとともに例年に恥じないよう準備して参りました．準備は会場の選定から始まり，北里大学の佐藤俊之先生にご尽力いただき，相模原市南メディカルセンターを会場とすることができました．そして東海大学 伊藤仁会長を要に行われた昨年資料を提供していただくなど，皆様に支えられたおかげで，我々少人数のスタッフで 197 名の参加者をお迎えすることができました．この場を借りて，心より感謝申し上げます．

さて会長を拝命した川本は，帝京大学医学部附属溝口病院に赴任して間もない時期でもあり，神奈川県臨床細胞学会の実情を知らず，はたしてどうなるかと不安でした．しかし，学会が近づいてみると一般演題に 15 題と多数の申込をいただき，きわめて活発な神奈川を感じました．

演題は希少例や診断に苦慮した症例報告から技術的なことまで幅広い内容で質疑が活発に行われました。また、若手の演者には貴重な経験の場であったと思う反面、神奈川県予防協会の蔵本先生（元日本臨床細胞学会理事長）が自らご発表になられ、気の引き締まる思いでした。

教育講演Ⅰに日本医科大学武蔵小杉病院病理診断科 永井祥子先生に「乳腺超音波像と細胞診」として、基本的な超音波の所見と見方に細胞像を合わせ組織型推定に至る過程をご講演していただきました。細胞像で判定に苦慮することの多い乳腺ですが、判定材料としてエコー像を加えることの大切さを学びました。

教育講演Ⅱには帝京大学医学部病理学講座 笹島ゆう子先生に「卵巣腫瘍の病理と細胞像・・・体腔液の実践的細胞診断」をお願いいたしました。体腔液に出現する悪性細胞の組織型、原発巣を判定する場合に、細胞所見とともにセルブロックによる免疫染色を行うことの有用性と、WHO分類第4版での改訂点を解説していただきました。

これら二つの教育講演はそれぞれ乳腺と卵巣腫瘍について、とても分かりやすい内容で、ご参加いただいた皆様に有意義で、日常細胞診業務に大変役立つものだったと感じております。

スライドカンファレンスでは、貴重な症例を呈示していただきました。中には若者よ、もっと前に出てこいとメッセージを送った演者もいて活気付きました。なお、時間に制約があることで、進行方法を変えさせていただきましたが、ご理解いただきました座長の先生に、あらためて感謝申し上げます。

学術集会後の懇親会にも多くの人にご参加頂き、大変盛会でした。中には飲み過ぎた方もいたようですが無事にお帰りになったと聞き、安心いたしました。

最後に、神奈川県臨床細胞学会学術集会を無事に終えることができたのは、皆様のご協力があつての事です。スタッフ一同より御礼を申し上げますと共に、不手際のあつたことをお詫びいたします。そして、これからも神奈川県臨床細胞学会学が発展していくことをお祈り申し上げます。



川本会長より開会の挨拶



フロアからの活発な討論



教育講演Ⅰの永井祥子先生



教育講演Ⅱの笹島ゆう子先生



満席の会場



スライドカンファレンス症例のポスターで意見交換



スタッフ一同の面々 皆様のご協力に感謝申し上げます



次回の神奈川県臨床細胞学会会長 宮城悦子先生のごあいさつ

「聖マリアンナ医科大学病院 ～病理診断科～」

聖マリアンナ医科大学病院は昭和48年に開院し今年で開院42年を迎えます。診療科は30科、許可病床数は1208床と超大型大学附属病院です。川崎市北部地域における地域がん診療連携拠点病院であります。その他に県内には3つの関連病院（川崎市立多摩病院、横浜市西部病院、東横病院）と1つのクリニック（ブレスト&イメージング先端医療センター附属クリニック）があります。

病理診断科のスタッフと運用実績をご紹介します。

高木部長を筆頭に9名の医師（内、認定病理医6名）と、12名の臨床検査技師（内、細胞検査士10名）、1名の技術員、任期付きパート1名（細胞検査士）および2名の事務員で構成されています。検査技師スタッフの平均年齢は30歳前半であり大学病院としては経験値に不安を残しつつも、若さと活気に満ちあふれた職場環境で日々多数の病理検体と戦っています。

平成26年の運用実績ですが組織診検体：約12800件、細胞診検体：15600件、解剖：30件、迅速診断：924件、免疫染色枚数：約17700枚、ISH：288枚です。

大学病院として多くの情報を提供できるようこれからも努力していきたいと考えています。

続いて検査室の紹介をいたします。

“切り出し室”



決して広い部屋ではありませんが、多い時は10名以上の医師と技師で渋滞し

ます。ホルマリン環境測定では第二管理区分であり、なかなか施設の改善が進みません。また、病理では珍しい低温庫が角にあります（機能停止中）。破壊して部屋を広くしたいです。

カセットブロックは印字機により年間約 5 万個の印刷をしています（平成 25 年導入）。



ホルマリンは「色つき瓶詰め」を購入し、検体の紛失防止、ホルマリン詰め作業によるホルムアルデヒド暴露防止に努めています。

“薄切室”



6 台のマイクロトームがありましたがガラス印字機導入（平成 25 年導入）のため、スペース確保に 1 台を処分しました。現在は 5 台で運用しています。午前中は少なくとも 3 名が薄切し 1 名の切片拾い係がいます。年々組織件数が増加し、お昼を跨いでの薄切も珍しくありません。

“免疫染色”



5台の自動免疫染色装置（ニチレイ：4台、DAKO：1台）がフル稼働しています。ISHは1次抗体までを手手法で行い、それ以降を自動免疫染色装置で行っていましたが、昨年の秋よりベンチマークGX（6台目の自動免疫染色装置）が導入され完全自動化しています。

“細胞診鏡検室”



ルーチン用顕微鏡3台、ディスカッション顕微鏡1台で基本的には3名で、鏡検と検体処理をしています。細胞診検体は年々減少傾向であり組織件数に逆転される時が来るのかと思うと少し寂しいです。

“解剖室”



自慢の解剖室です。他ではあり得ない広さを誇り、病理検査室の床面積の約20%を占めています。また病理検査室の隣にあり、ドア一枚を隔てて解剖が行われています。近くて良い反面、臭いの問題が。解剖数は今では年間30体ほどに減り、もう一つの自慢の人工大理石製解剖台も飾りとなっています。この解剖台、床と一体化し中に水道管が通っているため簡単に切って取り外すことができないということで対処に困っています。

“遺伝子検査”



免疫染色エリアの裏手に、強引に遺伝子検査スペースを作りました。現在の検査項目は、乳腺・胃のHER2 FISH、肺のALK FISH、肺のEGFR (RT-PCR)、乳腺センチネルリンパ節のOSNA法を行っています。OSNA法の機器は4年前に導入され、蛍光顕微鏡とRT-PCRは共に昨年7月と9月に導入されています。昨年の実績ですが、乳腺のHER2 FISHに関しては11ヶ月で634件行っています(昨年2月スタートのため)。今年は660件ほどでしょうか。また今年は4月より肺のEGFR 遺伝子変異解析とALK FISHがスタートし、これらを含め遺伝子検査は専任1人、他業務兼任1名で対応しています。

“最後に”



施設の建て替えの話がありましたが、東京オリンピックが決まったことで経費が膨らみ、楽しい話は白紙に。既存の施設をあと20年は使っていくそうです。できることなら定年退職までに新病院で働きたい、もっと言えば地下鉄が通り、「聖マリアンナ医大下」なんて駅ができれば良いと思っています。横浜市営地下鉄が延びるのか、小田急電鉄初の地下鉄か、期待したいです。

最後に、聖マリは自他共に認める美女揃いですが男子もイケメンが揃っています。今後の活躍が期待される若者揃いですので、これからもよろしく願いいたします。

(文責：草薙 宏有)

◇◇ お知らせ ◇◇

平成26年より本会の名称が変更になりました。

日本語名称：**神奈川県臨床細胞学会**

英語名称：**Kanagawa society of clinical cytology**

新企画 訪問帳 について

訪問帳への掲載施設を募集しています。

施設の状況や近況など、写真を含めてご紹介ください。

掲載を希望される施設は広報委員までご連絡ください。

ニュースレターは神奈川県臨床細胞学会広報委員会が制作しています

広報委員：磯崎 勝（委員長）、高久良子（副委員長）、岩撫成子、高瀬章子、
長谷川哲哉、坂野みどり、本野紀夫
